

名作再読、拾い読み(13)

『ささやかだけれど、役にたつこと』 ("A small, good thing") 小澤 文彦

レイモンド・カーヴァー (Raymond Carver, 1938-1988) はアメリカの小説家・詩人で、オレゴン州出身です。高校を卒業して直ぐに結婚した為、家族を支える為に様々な職に就かなければなりませんでした。カリフォルニアのパラダイスに移転してから創作に興味を持ち、ジョン・ガードナーの指導する大学の創作クラスで小説の書き方を学び、カリフォルニア州アルカータのフンボルト・ステイト・カレッジで学位を得ています。70年代以降はアルコール依存症に苦しみながらも合衆国の幾つかの大学で講師を勤め、創作活動を続けました。短編小説が得意で、『頼むから静かにしてくれ』(1976)、『愛について語るときに我々の語ること』(1981)、『大聖堂』(1983)などの短編集の他に、『炎—エッセイ・詩・短編』(1983)があります。日常生活の平凡な情景を軽妙なタッチで描いていますが、彼の作風には、ヘミングウェイ、チューホフ、カフカの影響が指摘されています。ワシントン州ポート・エンジェルズで肺癌の為50歳の若さで亡くなりました。

彼の作品の中で、『ささやかだけれど、役にたつこと』の内容は、自分や自分の身近な人誰にでも起こるような事件を扱っていて、素直に共感の持てる作品です。是非ともお勧めしたい小説です。

誕生日を迎えようとしていた子供が交通事故に遭って意識不明の重体になります。なぜ昏睡状態が続いているのか病院側はうまく説明できず、検査を何度も繰り返すばかりでした。そして、両親の願いも空しく、子供は死んでしまいます。

母親はパン屋にバースデー・ケーキを注文しておいたのですが、子供が轢き逃げにあった為そのことをすっかり忘れていました。パン屋の方では約束のケーキを受け取りに来るよう催促の電話をするのですが、事情を知らない父親は乱暴な対応をして変態野郎からの電話だと決め付けてしまいます。

母親は漸くの事でケーキを注文していたことを思い出し、夜中の電話の主がパン屋であることを突き止めます。腹を立てた夫婦は文句を言いパン屋の店へと車を走らせます。

パン屋は子供が轢き逃げにあつて死んでしまったことを知ると、夜中に電話を掛けたことを謝り、商売の為に焼くパンの仕事を中断して、二人の為にパンを焼いてあげます。夫婦はパン屋の話に耳を傾け、食べられる限りパンを食べます。夜が明け太陽光線が窓の高みに射し込んできても彼らは

語り続けるのでした。

交通事故あるいは病気などで家族や友達が入院し、怪我や病気の状態の説明を受けたりする時の、焦りや不安感が見事に描かれています。子供が死ぬ場面など、簡潔な文章で述べられており、多くの人の死は、このように呆気ないほんの一瞬にすぎないことが不思議なほど納得でき、そこに絶望的な悲しみの籠められている事が理解できます。

夫婦が、夜中の電話をいたずら電話と勘違いし、ケーキを受け取りに行かなかったことを謝罪せず、代金も未払いのままであることを忘れ、怒りの感情に捉えられて攻撃的になる態度も一般的によく見受けられる現象です。仕事や勉強の怠慢を注意されると、自分の落ち度を認めず、逆に注意の仕方が悪いと言って居直る人は少なくありません。乱暴に押し入ってきた夫婦が、子供が死んだ為にそのような行動をとっていることを理解できるパン屋は、矛盾した行動をとる人間心理を自分の人生経験からよく認識している人のようです。パン屋は夫婦に次のような言葉を掛けます。

「何か召し上がらなくちゃいけませんよ」とパン屋は言った。「よかったら、あたしが焼いた温かいロールパンを食べて下さい。ちゃんと食べて、頑張つて生きていかなきゃなんのだから。こんなときには、ものを食べることです。それはささやかなことですが、助けになります」と彼は言った。

本来なら怒りの矛先を轢き逃げ犯人や治療のできなかった病院側に向けるべきなのに、弱い立場の自分へ間違つて向けてきた夫婦に対して、パン屋はコーヒーを飲ませ、パンを食べさせて慰めます。このような寛大な態度は、下積みの苦労を重ねてきた人の持つ優しさや温かさを感じさせ、悲しみや空しさにもがいている人々に対する救いを暗示しているようです。

参考文献

1. Raymond Carver, "A small, good thing" in "Where I'm calling from" Kodansha International, 1989
2. レイモンド・カーヴァー著、村上春樹訳『ささやかだけれど、役にたつこと』(中央公論社、1989)

おざわ ふみひこ (係・情報サービス課)